

カレに恋するオトメの事情

第一章

マナーモードにしたスマートフォンを上着のポケットから取り出し、表示されている時刻を確認する。

そろそろかな――

とある休日。わたし、鹿島美咲は、リアル・クローズのイベントとして有名な【ファッショングールズ・フェスティバル】、通称ガルフェスの会場に来ていた。関係者招待席に座り、最終ステージの幕が上がるのを心待ちにしているところだ。

ステージから張り出したランウェイを見つめていると期待が高まり、二十五歳のいい大人のくせに、子供のようにそわそわしてくる。アーティストのコンサートでもそうだけど、幕が上がる直前の高揚感は、結構好きだ。

わたしは、隣に座る上司、人見和久部長の様子をうかがう。四十歳でバツイチの部長は普段以上にスーツ姿が決まっている。かくいうわたしも、少し改まった雰囲気ワンピースを着ているんだけど。

そう、わたしたちは仕事の一環でこの席に着いている。

業界ではそれなりに名の通った『アドワークス創新堂』という広告代理店に就職して二年。部署は企画制作部で、紙媒体の広告をはじめ、テレビCMやプロモーションビデオなども制作する仕事に携わっている。夢は、企画・制作の舵を取るクリエイティブ・ディレクターになること。まだまだ道のりは遠いので、日々、勉強中だ。

今日ガルフェスに来たのは、とあるモデルに挨拶するため。

先日、アパレルメーカー大手の「鳴沢」から、働く女性に向けた新ブランド【ZELLA】のプロモーションビデオ制作の仕事を請け負った。起用モデルは、今をときめく茅野アリサだ。彼女は、今日のショーにも出ている。そのアリサに挨拶に来たというわけ。

わたしの膝の上には、会場に来る前に人見部長が買い求めた、大きな花束があった。バラのようなど多弁のトルコ桔梗を中心に、ポンボンマムとカスミソウでまとめたものだ。部長は、彼女が雑誌のインタビュで「好きな花はトルコ桔梗」と答えていたのを覚えていたとかで、迷うことなくその花を選んだ。

そして部長は席に着いてからずっと、ガルフェスのパンフレットを熱心に眺めている。ちらりと見たページは、出演モデルの一覧。メインモデルは顔写真入りで掲載されていて、部長の目はアリサの写真に向けられていた。実は、彼は、彼はずいぶん前から彼女のファンみたい。

「鹿島くん、茅野アリサってやっぱり美人だねえ」

「そうですね」

部長に話しかけられて、わたしは頷く。

現在、二十五歳のアリサ。彼女は雑誌の仕事を主にしていて、テレビなどにはあまり出演しない。けれど知的な容貌と表情の豊かさで人気を博し、ファッションリーダーとして活躍中。

同じ二十五歳でも、まだまだ半人前のわたしとは大違い。比べたってどうしようもないものの、思わず溜め息が零れてしまう。

「ティーンエイジャー向けの雑誌モデルを経て、今じゃ押しも押されぬトップモデル。海外のコレクションに出演したこともある。今回の仕事、彼女にオファーできてよかったよ」

「はい、先方もアリサならって快諾でしたし。知的な彼女のイメージは、ブランドコンセプトにもぴったりだと思います」

アリサを今回の仕事に推挙したのは人見部長だ。ちょっと公私混同が見え隠れしているけれど、部長の意気込みは半端ない。大人気で前売り券が即完売するガルフェスなのに、その招待席チケットを入手してきたくらいだ。

ただ、おかげで観覧してみたいと思っていたこのイベントに足を運ぶことができた。残業続きのわたしにとって貴重な休日を潰すことになってしまったけど、声をかけてくれた部長に感謝。

「あの、部長。このあと挨拶にうかがうなら、わたしじゃなくて久世さんが来たほうがよかったのではありませんか？」

こういう仕事からみのイベントには、先輩の男性社員、久世さんが同行することが多い。まあ、久世さん本人が「男同士でファッションショーに行くなんて寒すぎる」と早々に辞退したんだけど。「何を言ってるんだい、鹿島くん。ファッションショーだよ？ 野郎同士で来ても面白くないじゃ

ないか」

「っ！」

わたしは思わず噴き出しそうになるのを、必死にこらえた。二人とも同じことを言っている。

「それにね、言うまでもないが、これからバックスクリーンに流れる映像をよく観ておきなさい。クリエイターにとって、良い勉強になると思うよ」

「部長——」

そうか。ファッションショーを観られることに浮かれていたけど、そういう目的もあったんだ。良いものを見せて部下を育てようとしてくれる部長の心遣いは、とても嬉しかった。

社内には、マイペースすぎる部長を苦手にしている人がいるみたい。でもわたしにとって、人見部長はなんでも相談できる理想の上司だ。

わたしが今の部署に配属されたのは、部長の口添えがあったからだと聞いている。専門学校時代、デザインコンペに応募したわたしの作品を評価してくれたのだから。

だからこそ期待に応えるべく、仕事一筋の毎日。そのせいで「恋人いない歴イコール年齢」を更新しているわけだけど、今はこれでいいと思っている。

そりゃ、わたしも一応女子だし、恋愛に興味だってある。でも、相手を気遣ったり気遣われたり、こまめに連絡を取り合ったり……というのが面倒になってしまって、なかなか恋に発展しない。わたしは、きつと恋愛に向いていないのだろう。

こんなわたしにも、唯一、心を許せた男性がいる。といっても彼との間にあったのは友情以外の何ものでもなく、彼を恋愛対象として考えたことはない。女友達よりも気の置けない、あとにも先にもたった一人の親友だ。

さつき部長は、アリサが「海外のコレクションに出演したこともある」と言っていたけど、実はその親友もよく似た経歴を持っている。違うのは、現在モデルとして活躍していないところだけ。

わたしは膝の上の花束に目を落とし、親友の顔を思い浮かべて、そっと微笑む。

ねえ、優真。あなたは今、どこで何をしているの？

連絡もくれないし、あなたはもうわたしのことなんて忘れてしまったかもしれない。でもわたしは、今でもあなたのことを大切な親友だと思っているんだよ。

「お？ いいよか」

彼のことを考えていたわたしは、部長の声でハッと顔を上げた。

照明が徐々に落とされ、非常口のライトを残して会場全体が暗くなる。ブザーが鳴り響くと、客席は一気に静まり返った。【ファッション・ガールズ・フェスティバル】最終ステージのはじまりだ。

ズドン——

会場全体に重低音が響き、それがわたしの体にも伝わる。バスドラムの音が連なってリズムになり、バックスクリーンには【Fashion Girls Festival】の文字が映し出される。スポットライトが流れるように客席を照らし、オープニングムービーがはじまった。それとともに曲はアップテンポなものに変わり、スクリーンには過去のショーのハイライトが次々と

映し出されていく。どんどん盛り上がる中、今年のショーを象徴する画像がいくつも浮かび上がり、ふたたび重低音がズドンと響いた。

一瞬の暗転。そして映像が切り替わり、ブランド名がスクリーンに映し出された。

「すごい……い……」

曲調はがらりと変わり、ブランドの服を身にまとったモデルたちがにこにこ登場した。声援を送る観客に手を振り、ランウェイを楽しそうに歩いていく。

モデルだけではなく、彼女たちをアップで映し出すバックスクリーンにも目を向ける。華やかで目まぐるしく変わるショーステージは、どこを見るべきか迷ってしまう。

そうやって忙しなく目を動かしていたけど、しばらくすると観方がわかってきた。別にショーのレポートを書くわけではないのだから、自分の感性に任せて好きに観ればいいのだ。映像が流れるバックスクリーンを中心に、ショーを楽しむことにする。

「あ、アリサだ」

部長の声が聞こえた。わたしも、ステージの袖から出てきた彼女に視線を向ける。

これは、じっくり観なければ。それこそ一挙一動、見落としなどないように。アリサに仕事を依頼するのだから当然だ。

ステージの中央で一度ポーズを決めたアリサが、ランウェイを歩きはじめる。

会場の空気がなんとなく変わったような気がした。他にもモデルがいるのに、彼女に目がいつってしまう。すごい存在感だけど服が霞んでしまうことはない。それだけで、彼女がトップモデルである

ることを実感した。

アリサはにっこりと微笑んでステージに戻り、新たに出てきたモデルと並んだ――

その瞬間、わたしはアリサではなく、隣のモデルに目が釘づけになった。

「うそ、でしょ――?」

小さな呟きが零れる。

信じられない思いで、そのモデルを目で追う。

小さな頭、ほっそりとした体、しなやかに伸びた手足。

まさか? でも?

ううん、見間違えるはずなんてない。フレアの入ったスカートの裾をひるがえし、ピンヒールで危なげなくランウェイを歩いていくあのモデルは――YUMA。

そう、わたしの親友の優真だった。

広戸優真。

わたしが彼と出会ったのは、高校一年のとき。彼とは、同じクラスだった。

優真は顔を半分隠すように前髪を伸ばしていて、メガネをかけていた。ちょっと暗そうで、話しかけられると答えるけど、自分から会話をすることはしない。ともすると、いるのかわからないほど存在感が薄かった。

でもある日、その印象が大きく変わった。

今でも、はつきり覚えている。わたしが優真と話すきつかけとなった出来事。

一学期の最後の行事——期末テストあとの球技大会。わたしは一大決心をして、憧れていた先輩に勇気を振りしぼって告白した。わたしと同じ写真部に所属する三年生の彼は、夏休みを前に部活を引退する。ここで告白しなければ、それまでのようには会えなくなってしまう。

競技の合間に彼を呼び出したのだけど——結果は玉砕。^{ぎやくさい}いつも優しかった先輩に、「好きなら告白する前に、相手の立場や状況をもっと気遣うべきだ」と言われた。それが思いやりじゃないのか、と。

わたしは頭をがっんと殴^{なぐ}られたようなショックを受けて、絶句した。

先輩の言葉は、もつともだ。先輩は大学受験を控えていたのに。

自分のことしか考えていなかったと思知らされて、わたしの初恋は終わった。

あとで写真部の別の先輩から、彼の模試の結果が芳^{かほ}しくなく、志望校の合格ラインには届いていないらしいと聞いた。とても誰かと付き合うような余裕など、なかったのだった。

先輩に振られた直後、自己嫌悪のあまり立ち尽くしていると、ふいにタオルが頭にぼさりとかけられた。気がつけば、優真が目の前にいた。学校指定の体操服に、グレイのジャージのズボン。袖から覗^{のぞ}く細い手首は白く、男子というよりも少女つばさを感^かじさせる。

『そのタオル、下ろしたばかりの新しいヤツだから』

『え？』

相変わらず前髪は顔半分を覆^{おほ}うように下ろされていて表情を隠していたが、思いのほか優しい声

だった。

『とりあえず、もつと泣いとけば？』

『……うん』

そのとき、わたしは自分が涙を流していたことに気がついた。

わたしの告白&玉砕シーンにたまたま遭遇^{そうごう}してしまった優真。彼は、泣いていたわたしを放^{はな}つておけなかつたらしい。

『あーあ、みつともないとこ見られちゃった』

わたしはばつが悪くて、彼のタオルで涙を拭^{ぬぐ}い、なんとか明るい口調で言った。

『何も見えないから。ここ通りかかったら、目にゴミが入った鹿島さんが泣いてただけだし』

そんなことをさらりと言われ、ますます涙が溢^{あふ}れてきた。

『じゃあ俺、行くから。男子バレー、そろそろ試合なんだ』

そう言って体育館に向かって歩き出した優真だけど、すぐに足を止め、わたしに向き直り手を差し出してきた。

『鹿島さん、体育のときに髪を縛^{むす}ってるよね。ヘアゴム、貸してくんない？』

『貸してって、このゴム？』

わたしは不思議に思いながらも、手首にはめていた黒いゴムを外して優真に渡す。

『前が見づらいと、ボールが飛んできたとき危ないかなって思ってたさ』

ゴムを受け取った優真は、その場で自分の前髪をくくった。

『広戸くん？』

わたしは、このときはじめて彼の顔をまともに見た。メガネはかけていたけど、レンズ越しの奥二重の目はとても綺麗な色をしていて、ついじつと見つめてしまう。

『そんなに変な顔してる？ 俺、自分の顔、コンプレックスなんだよね。見られたくなくて、前髪下ろしてただけだ』

『い、いやゼンゼン。むしろ美人？』

気まずそうに言った優真に、わたしは慌てて首を振った。

その顔がコンプレックスって、どういうこと？ と問い返したいくらいだった。中性的な顔立ちをしているから、男子としては劣等感を覚えてしまうのかもしれないけど――

『……サンキュ。そうストレートに言われると恥ずかしいね』

少し曖昧な笑みを浮かべた優真は、今度こそ体育館に向かった。先ほど先輩の後ろ姿を見送ったときとは違い、わたしの胸はほわんとあたたかかった。

それから顔を洗いにいき、体育館には向かわず教室に戻った。しばらくして、うちのクラスの男子バレーチームで優真が大活躍し、三年生チームを相手に一セットも落とさず勝ったことを知った。その三年生チームには例の先輩がいたらしい。

スポーツができる男子は、それだけでもててしまふ。加えて美形なら、もう言うことなし。これまで優真を汚さないメガネ男子とスルーしていた女子たちは、彼を話題に出すようになった。でも優真は相変わらず前髪を下ろしていて、周囲が騒ごうと我関せずという態度を取っていた。

そうこうしているうちに、夏休みに入った。

休み中のある登校日。放課後は写真部の活動に参加し、下校前、教室に寄った。買ったばかりの雑誌を忘れたことに気づいたからだった。

誰もいない教室には、優真がひとりでいた。それもわたしの席に座り、机に広げた何かを熱心に眺めている。

『あれ？ 広戸くん、帰ったんじゃないの？』

『鹿島さん……っ』

びっくりしたように顔を上げた優真。わたしは彼に近づき、机の上に自分の忘れものが広げられていることに気づいた。ティーンエイジャー向けのファッション誌だ。

『エッチな本でも見てるのかなって思ったら、わたしの雑誌じゃん』

『あ、ごめん、勝手に見て』

『別にいいよ？ ファッション、好きなの？』

『……ま、まあ……、そんなところ……なんだけど』

優真は、まづいところを見られてしまったと言わんばかりに言葉を濁した。

『おかしい……よね。男がこういう雑誌を見るのって』

『好きならいいんじゃないの？ わたしだって少年マンガ読むし』

『いや、女子が少年マンガ読むのとはちよつと違うよ』

いったい何を気にしているのか、優真の声には覇気がなく、やがてうつむいてしまった。

わたしは優真をじっと見つめた。さらさらの髪、日焼けとは無縁の白いうなじ、男子にしては少し華奢な肩と細い腕。大人になる前の、アンバランスな少年の体躯をしている。

そのとき、わたしの脳裏で何か弾けた。

『ねえ、ちよつと頼まれてくれないかな。写真のモデル、やってほしい』

この日の部活では秋の文化祭に向けて話し合いをし、例年どおり各部長が作品を発表することに決まった。文化祭後、それらの作品は市が主催する学生作品コンクールに出展される。

わたしは他の部長と違って高機能のカメラを持っていなかった。ただコンピューターグラフィックスに興味があったので、デジタル加工を施した作品にしようと考えていた。今にして思えば大したものじゃないんだけど、当時のわたしはすごい作品になるんじゃないかってドキドキしていた。

『モデル？ 俺が？』

優真はかなり驚いたみたいで、声が裏返っていた。

『わたし、写真部でさ。文化祭に作品を出すんだけど、他の部長みたいに良いカメラも技術も持たなくて。だったらアイデアで勝負するしかないじゃない？ モデルといっても、たぶん想像しているのとはまったく違うものになる』

優真は自分の顔がコンプレックスだと言っていたから、断られるかもしれない。

そんなことを思いながら、わたしは作品の構想を彼に説明した。背景や人物、イラストなどをコンピューターでコラージュしたものにしたいと。すると――

『わかった。そういう話なら面白そうだね』

引き受ける条件として優真が出したのは「モデルが誰なのか決してわからないようにする」こと。モデルの正体をわからないようにする――それはデジタル加工について考えることより、わたしをわくわくさせた。その日、わたしたちは下校時間ぎりぎりまでアイデアを出し合い、行きついた先が「女装」だった。

彼は、さして抵抗することなくそれを受け入れた。

『もしかして広戸くん、こういうのに興味があった？』

『……かもしれない。女の子って服装だけで変身しちゃうじゃん。ちよつといいなあって思ってた。顔だって、メイクで変えられるし』

『自分の顔、きらい？』

『女顔すぎてキライ』

『今はそれでも、大人になったら変わるかもよ？』

高校一年生。早生まれの優真はまだ十五歳で、これから大人になるのだから。その日以降、わたしたちはたくさん話すようになった。

連絡先を交換し、夏休み中には撮影をさせてもらったり、作品について相談に乗ってもらったりした。教室内では寡黙な優真だったが、意外にも話題は豊富で、作品のことだけでなく、好きなファッションやスイーツ、アイドルなど女子が好む話もどんどん振ってくる。なかったのは恋の話ぐらいいかな。

そのせいか優真を異性として意識することはなかった。撮影を終えて作品が完成するころには

「親友」と認め合い、「優真」「美咲」と名前で呼ぶようになっていた。

そして迎えた文化祭。わたしの作品は他の部員たちから、「こんなの写真作品じゃない。展示できない」とブーイングを喰らった。変化球だと自覚はしていたけれど、たまたま部に顔を出した例の先輩にも苦言を呈されて、少し胸が痛かった。

顧問の先生が仲裁してくれて作品は展示してもらえたのだけど、それがあらぬところで評判になった。市が主催する学生作品コンクールで賞を取ってしまったのだ。これを機に、部員たちとの間にますます溝ができてしまい、わたしは写真部を辞めた。

でも後悔はなかった。写真を撮るのは好きだけど、写真部での活動が自分のやりたいこととは違っていると気づいたからだ。それに、優真がそばにいてくれたことも大きい。

彼は、学校では少し暗めのメガネ男子として過ごしていた。けれど休日、わたしと出かけるときに女装をするようになった。ショッピングモールや映画館、雑誌に紹介されたスイーツ店……いろんなところに出かけて、いろんなことを話し、時間はあっという間に過ぎていった。

季節が変わり、高校二年生になったわたしたち。

同じクラスになった男子から交際を申しこまれたりもしたけど、お付き合いをする気になれず、断ってしまった。だって、恋をするよりも優真と過ごすほうが楽しかったから。

そんなある日、モデルにならないかと優真がスカウトされた。

いつものように二人で出かけた際、雑誌のロケ隊に偶然出くわして、声をかけられたのだ。その雑誌は、わたしが愛読しているガーリー系のティーンズファッション誌。

もちろん、わたしは賛成した。女装が板につき、とても男子には見えないくらい綺麗になった優真には、もっと相応しい世界があるんじゃないかと感じていた。でも優真は本来の性別を隠してやっていけるわけがないと、正直に自分のことを告げて断った。

ただ先方も粘り強く、一回でいいから読者モデルとして出てほしいと交渉してきた。結果、優真は折れて撮影に応じた。性別は秘密、どこの誰か決して身元を明かさないと条件にして。

「街で見かけたおしゃれ美人」と誌面で紹介された優真は、たちまち人気が出ってしまった。どこかミステリアスで、少年のような少女――

もっと優真を載せてほしいと読者の要望が高まったらしく、雑誌の編集部の方が彼を訪ねてきた。はじめは断っていた優真だけど、やがてその熱意に負けて、首を縦に振った。

こうして、プロフィール不詳のファッションモデル「YUMA」がデビュー。モデルの仕事をはじめて忙しくなった彼とは、以前みたいに外に出かけることはなくなった。でも、メールや電話で連絡を取り合った。わたしは親友の成功が嬉しかったし、彼を心から応援した。

高校を卒業するころ、彼は専属モデルとして誌面のトップを飾るほどになった。

その後、わたしと優真はそれぞれ別の大学に進学。

たまに会ってはいたものの、互いに忙しい日々を過ごしていた。

そして二十歳を迎えたある日、優真から呼び出され、イギリスに留学すると聞かされた。

『ちよっと……いっばいいいっばいになっちゃったから、日本を離れることにした』

当時、彼はデビューしたティーンズ誌を卒業し、モード系の雑誌に活躍の場を移していた。YU

MAのミステリアスなイメージを、より活かすために。

ショーモデルとしても名が売れ出し、人氣が絶頂のころだった。

『仕事が忙しくてプライベートな時間がないから、疲れちゃったのかもしれないね』

わたしが言うと、優真は少し寂しげな笑みを浮かべた。

『美咲の応援があったから、頑張れたんだよ。ありがとう。俺も、美咲をずっと応援してる。自分のやりたいことをやれよ。高校のとき、俺をモデルにして作品制作してみたにさ』

わたしは大学に進学したものの、自分のやりたいことが見つけれず、ずっと悩んでいた。

写真、グラフィック、ファッション、映像。気になるものに手を出してはいたけれど、どれも中途半端になっている。

『優真——』

高校一年の夏を思い出す。大人になっていく時間の中で、初心をすっかり忘れていた。

わたしは前進するために大学を辞め、デザインの専門学校に入学し直した。

優真がイギリスに旅立ったあと、しばらくは連絡を取り合っていたけど、二年ほど経つと手紙もメールも途絶えがちになった。

ある日、課題の制作に追われていたわたしは、手にしたファッション誌で優真のことを知った。

ロンドンのコレクションで、日本人モデルが話題沸騰という見出しがついていた。

そしてその記事を最後に、ファッション誌が優真の活躍を伝えることはなくなった。

「誰だい、あのモデル。パンフレットに名前はあるのかな」

隣から聞こえた声で、ハッと我に返る。ちらりと視線を向ければ、人見部長がステージをじっと観ていた。

ステージでは、YUMAとアリサが先ほどとは違う服を着てステージ上に立っている。

部長、おそらくパンフレットには載っていないはずですよ。しっかり確かめたわけではないが、わたしが「YUMA」という名前に気づかないわけがない。おそらくイベントを盛り上げるための「シークレット・モデル」だったのだろう。

「すごいな、アリサと並んでもまったく引けを取らない」

二人のモデルは、笑顔を振りまきながらランウェイを歩く。まるで仲のいい姉妹が休日のショットピングを楽しむように、ときに顔を寄せて、見つめ合って、腕を組んで……

そういう演出なのだろうけれど、アリサと笑みを浮かべて歩く彼に違和感があった。

彼はティーンズ誌でモデルをしていたときから誰かと一緒に写ることは少なく、モード系の雑誌に移ってからはほとんど一人のショットだった。そして、口を開けて笑うことなんてまずない。

「笑わないモデル」とも言われていたのだ。

「彼女、いいね。存在感がある。それに、なんて綺麗に歩くんか。ウォーキングでここまで魅せるモデルも、そうそういないな。あ、そうか、あいつが言っていたのは彼女のことか」

「部長？」

人見部長は、ひとり納得したように頷いている。なんのことだろう。

「いやね、この席のチケットを手配してくれた知人が言っていたんだよ。今回のショーに、かつてロンドンのコレクションで大活躍した日本人モデルが出るってね——って鹿島くん？ どうしたんだい!？」

部長は、目を瞬かせてわたしを見た。

「な、なんでもない……です……」

わたしは慌てて首を横に振る。

部長の話聞いていたら、どういうわけか鼻の奥がつんとして、視界がぼやけてきたのだ。

「なんでもないって言われてもねえ。胸を貸してあげたいのはやまやまだが——ってこんなことを言うって、セクハラになるかな？ 悪いが、これで我慢してくれ。ショーが終わるまでには、平常運転に戻ってくれよ」

「……すみません。大丈夫です、すぐ止まります」

わたしはぐすつと涙をすすり、部長が差し出してくれたハンカチを受け取って顔を覆った。

みつともない。まったく、どうして涙なんか出てくるかな。

「もしかして、アリサと一緒にいたモデルに感動した？ 観客を泣かせてしまうなんて、すごいモデルだね」

「そ、そういうわけじゃないんですけど」

わたしは言葉を濁しながら答える。

部長はどう思うだろう、わたしと優真の関係を知ったら……

——優真。日本に戻ってきているなら、連絡くれればいいのに。メールアドレスも携帯番号も、変わっていないよ。いや、わたしからすればいいのか？ ショー観たよ、カッコ良かったって。

けれど、久しぶりに優真を見て心が弾んだわたしの脳裏にふと不安がよぎる。

彼はまた、わたしのことを親友だと思ってくれているのだろうか。

そう考えた瞬間、胸が苦しくなった。

途絶えがちだった優真からの、最後のメール。それは、わたしが今の会社に就職したことを告げたときの、「頑張れ。どこにいても応援してるから」という返信メールだった。

それから、何度かメールをしたけれど返事がくることはなく、わたしもメールを送らなくなってしまった。だけど彼に話したいことはたくさんあり、優真宛ての出せなかったメールが、携帯電話の未送信フォルダに溜まっていった。

今日、優真を見たことは、このままわたしの胸にしまっておいたほうがいいのかもしれない。連絡して迷惑に思われるのは、やっぱり辛い。それに、優真の今の立場だって気遣わなくては。

そんなことを考えていたら、涙は止まるどころかいつそう溢れて、ハンカチをぐっしり濡らしてしまった。

「どうだい？ 平常運転いけそう？」

ショーに出演したモデルが全員ステージに登場し、ガルフェスは華やかなフィナーレを迎えた。

「なんとかか……」

「頷きながら答えたものの、わたしの涙腺はまだゆるんでいた。早く涙を止めて、目もと周辺の『修復作業』——メイク直しに取りかからないと、このあとの仕事に差し支えてしまうというのに。」

「鹿島くん、普段は物事に動じない印象があるからね。いきなり泣き出して、びっくりしたよ」

「すみません。自分でもまさか、こんなに涙が止まらないとは思ってなくて」

「恥ずかしくてたまらない。いい年をした大人なのに、人目を憚らず泣いてしまうなんて。」

「まあ、もう少しここにいるとしようか。すぐ席を立つても、帰る人で混雑しているだろうしね」

「はい」

それにしても、いきなり部下が泣き出したというのに、人見部長は余裕の対応だ。変に詮索してきたりもしない。大人だなあと、ますます尊敬した。

そうしてようやくわたしの涙が止まると、人見部長が声をかけてきた。

「そろそろ、花束を渡しにいかうか。いいかい？ 鹿島くん」

頭の芯がジンジン痺れているみたいなきがしたが、わたしは「はい」と返事をした。いつまでも泣いているわけにはいかない。これから仕事だと気合いを入れて、立ち上がる。

ホールを出るとロビーは人でごった返っていて、ショーの興奮が冷めやらぬ様子だった。それもそのはず、出演したモデルたちがロビーでメディアの取材を受けていたのだ。その周囲を一般客が取り囲んでいる。

「すみませんが、部長。ちょっとお手洗いに行つてきていいですか？」

わたしは、人見部長におずおずと申し出る。早いところ、メイクを直さなければ。

部長はすべてお見通しらしく、にっこり微笑んだ。

「泣きはらした顔もチャーミングだけど、行つてきなさい。この辺で待つてるから」

「はい」

わたしは、持っていた花束を部長に預けてトイレに向かった。混雑していたが、メイクを直すだけなので、並んでいる人の横をすり抜けて、化粧スペースに入る。

鏡の前に立ち、ポーチからファンデーションを取り出してさつそく顔の修復作業にかかる。どう塗つたところで大して変わるわけではないが、涙のあとは消したほうがいい。

「ね、アリサと一緒に歩いてたモデルって誰？」

「わかんない。パンフに名前あった？」

近くにいた女の子たちの会話が耳に入ってきた。優真のことを話題にしている。

「誰だっけ？ どっかで見たことある顔なんだよね。でも思い出せない」

優真が日本で活躍していたのは、五年以上前。日々、流行を追うファッション業界では、走り続けていなければ忘れられてしまうのだと肌で感じた。

でも、YUMAのことだもの。モデルに復帰したら、すぐに巻き返せる。

ほんの少し胸の奥がつきんとしたけれど、さんざん泣いたからか、涙が溢れることはなかった。

もう大丈夫。もう泣かない。もう……

気持ち落ち着けるように息を吸って吐くと、わたしはメイクを再開した。目もとから頬にかけてファンデーションを重ね、アイシャドウを塗り直してチークをはたく。つけまつけもマスカラも

つけない、シンプルなメイク。特別美人ではないわたしは、失礼にならない程度に化粧をしていればいい。これで充分だ。

「部長、お待たせしました。わ、すごい人」

人見部長のもとに戻ると、先ほどよりも多くの人で溢れていた。どうもロビーで取材を受けているモデルが増えたようだ。ここからは誰が取材を受けているのか見えないが、絶え間なくカメラのフラッシュが光り、シャッター音が響く。

人見部長は、わたしを見て口を開いた。

「取材を受けているのは、アリスたちだよ。つい今しがた、こちらに来てね。フィナーレのときに着ていた服と違うけど、見覚えはある。どこかのブランドに、取材の際は着てくれって頼まれたのかも知らないね」

「そうなんですか」

「少し様子を見よう。これでは近寄れないしね」

アリスに挨拶をするのが今日の目的。だけど、この取材が終わるまでは無理そうだ。

「すごい人気ですね、アリスは」

「いや、それだけじゃないみたいだよ」

どういう意味だろう。わたしは首を傾げる。

そのとき、取材陣たちの声が響いた——『こっちを向いてください』『につこりお願いします』『久しぶりの日本ですよね』『ロンドンと比べてどうでしたか?』

もしかして、アリスと一緒にいるのは優真? いや、この場合はYUMAか。

「彼女、すごいな。YUMAって言うんだってね。さっきからひっきりなしに質問されているみたいだけど、一言も喋ってない」

「一言も……?」

すごいって、そっち? でも、それは仕方がない。見た目は完璧な女性でも、声を聞けば性別がわかってしまうからだ。雑誌モデルをしていたころも、優真が取材で喋ることは決してなかった。

「すみませーん。彼女、こういう場に出るの久しぶりだから、質問、勘弁してくださいねー」

女性の声が聞こえた。誰だろう、この声。スタッフの人かな?

「じゃあ、アリスさん、かわりにお願いします。YUMAさんとは親しいんですか?」

「じゃあって——。YUMAとは仲良しよ。同じ事務所だし、私の妹分。以上、質問終わりー。まだこれから仕事なの」

この声はアリスだったらしい。彼女は明るく受け流すように答えていたが、「じゃあ」と言ってみてアリスに質問を向ける記者は失礼だと思った。

「待ってくださいよ。これだけお願いします。アリスさん、——さんとお付き合いられている話は本当ですか?」

誰とお付き合いられているって? 名前の部分がよく聞こえなかった。

「はあ? 言っている意味がよくわかりませ——」

「一緒に歩いていたらって目撃証言もあるんですけどー。答えてくださいよ」

アリサの言葉を遮って、記者は続ける。先ほど「じゃあ」と言った男の声だ。

「仕事がありますので失礼します」

「まだ答えてくれないですよ」

男は食い下がる。まったくこのどいつだ。さつきから、失礼なことを訊いているやつはっ！

だいたいそんな質問、今日のファッションショーにはまったく関係のない話だ。囲んでいた観客たちも、ざわざわしはじめる。

「うーん、ちょっと雲行きがまずそうだ」

すっと目を睨めた人見部長はそう言うのと、花束を抱えたまま人垣を割って中に入っていく。

「部長、待ってください」

わたしは慌ててあとを追った。

人垣の中心には、思ったとおりアリサとYUMAが並んで立っていた。すぐそばには、カメラとICレコーダーを手にした報道陣たち。その中の一人が、先ほどから失礼千万な質問をしていたのだ。

「茅野アリサさん、今日のショーはとても素晴らしかった！」

「は……い……？」

突然アリサに向かって花束を差し出した人見部長は、悪くなりかけていた場の空気を一変させた。当のアリサも、目を瞬かせている。

「ステキな花束。あらトルコ桔梗。私の好きな花だわ」

しかしアリサはトップを張っているモデルなだけあり、動じることなく花束を受け取った。

「ええ、あなたに贈りたくて用意しました。もしご迷惑でなければ、サインをいただけませんか？」

ずっとファンだったんです」

部長、さすがです。今この場を制しているのは、間違いなく部長です。

わたしは胸のうちで、空気の読めないファンを演じる上司に向かって拍手する。まあ、彼の言葉は本音なんだろうけど。

「はあ……、でもペンが」

部長の行動に、アリサも戸惑っているようだ。メディアが囲んでいるこの状況でいきなり現れ、花束を渡されてサインをくれなんて、普通なら迷惑なファンだ。でもそれは普通のとき。

「そうですね、サインにはサイン用のペンが必要です。ですから、取りに戻られてはいいかがですか？ 花は、そのままお持ちください」

「……！ ええ、わかつたわ。ありがとう」

ぱつとあでやかに微笑んだアリサは、優真に目配せをして一緒に関係者エリアへ戻っていった。残されたのは、部長と報道陣の方々、そしてわたし。

「おっさん、あんなこと言って。アリサは戻ってきやしねえよ。花も取られ損だな」

去っていくアリサの後ろ姿を見ていた部長に向かって、口汚い声がかかった。さつき失礼な質問をして、せつかくのショーの余韻をぶち壊してくれた男だ。

「いえいえ、これでいいんです。では失礼」

部長は穏やかに返事をして、踵を返した。

「おい、アリスのサインをもらうんじゃないのかよ」

男が怪訝そうに言い放つと、部長は立ち止まる。

「あなたも今、言ったじゃないですか。彼女はここには戻ってきませんよ？ サインは残念ですが、花を渡せただけで満足です」

「はあ？」

男はわけがわからないという顔をしたが、部長はそれ以上彼に構うことなく歩きはじめた。他の報道陣たちも、次の取材相手のもとへ散っていく。

わたしは男が忌々しげに舌打ちするのを横目に、部長を追いかけた。てっきり控え室に向かうと思っていたのに、部長が向かっている先は正面の出入り口だ。

「部長、アリスへの挨拶はどうされるんですか？」

「花を渡した時点で済んだよ」

「はい？」

あの、それはいったいどういうこと？ というか、花束を渡すのが目的だったっけ？

「おや、わからないって顔してるね。花束にはメッセージと僕の名刺をつけてあるからね。うちの会社が仕事を依頼していることは事務所から聞いているだろうし、名刺を見ればこっちの正体はわかるだろ」

名刺をつけてあるって……あんな一瞬で、そんなことまでしていたんですか？ やはり部長。抜

かりがない。

「もう少し話ができるかなって期待していたが、仕方ないな」

部長は、いかにも残念そうだった。でもアリスと顔を合わせるチャンスはまたあるはず。仕事を依頼しているのだから、なかったら逆に困るのだけど。

そう、アリスとは……。だったら、優真とは？ アリスがYUMAとは同じ事務所だと言っていたから、もしかしたら何かの弾みで会う機会が巡ってくるかもしれない。

そう思ったとたん、わたしの胸はきゅっと締めつけられた。でも――

優真のことは、もういいではないか。連絡が途絶えたのが答えなのだから。

そんなことを考えていたわたしは、部長が足を止めたことに気づいて、慌てて立ち止まった。どうしたのだろうと顔を上げると、部長はジャケットの内側に手を入れて、スマートフォンを取り出す。そしてディスプレイをタッチして耳に当てた。

なんだ、電話がかかってきたのか。マナーモードにしていたみたいで、着信音は聞こえなかった。

「はい、アドワークス創新堂、人見です」

雰囲気から、どうも仕事の話らしいと当たりをつける。

「あ、はい。え？ 今からですか？」

聞くつもりはなかったけれど、隣にしていると話が予測できてしまう。仕事の呼び出しがかかったに違いない。部長ともなると、休日のこんな時間まで大変だと思った。時刻はそろそろ九時を過ぎようとしているのに。

「こちらは構いません。願ってもないお話です。——わかりました。レイトンの……。はい、ではのちほど」

電話を終えた部長はスマートフォンをジャケットにしまい、わたしに向き直った。

「アリサのマネージャーからだったよ」

「マネージャーさんですか」

わたしがそう言うと、部長は頷いて話を続ける。

「それでね、さっきのお礼も兼ねて食事はどうかと言ってきた」

「は？ さっきのつて……」

部長の機転で、不本意なインタビューをかわしたのだよね。

そうか、アリサの話を聞いて、すぐに電話をしてきたのか。花束と一緒に渡した部長の名刺は、さっそく功を奏したわけだ。

「君はどうする？ 一緒にいた女性の方もぜひ、と言っているんだが」

「え、わたしもですか？」

思わず聞き返す。部長に連れがいるって、なぜわかったのだろう。わたしは少し離れたところに立っていたのに。

「遅くなるかもしれないから、無理することはないよ。だが何事も経験だと思って、行ったほうがいいことは確かだ。先方は、アリサと電話をかけてきたマネージャー氏が来るらしい」

「ご迷惑でなければ、ご一緒させてください」

部長の言うとおり、何事も経験。社員のわたしがトップモデルと一緒に食事だなんて、この先あるかわからないし、明日も休みだ。実家を出て一人暮らしだから、どれだけ遅くならうが平気。仕事で会社に泊まりこむことだって、あるしね。

それに来るのは、アリサとそのマネージャー。YUMA——つまり優真はいない。それなら大丈夫。

「わかった。じゃあさっそく向かおうか」

わたしの返事を聞いた部長は、どこか満足したように頷いた。

会場からタクシーを使い、指定された店の前に乗りつけた。

全国でも有数のホテル、プリンス・レイトンの正面にあるそのお店は、とても落ち着いた雰囲気。雑誌でもよく紹介される、人気のお店だ。

さっそく中に入り、部長が店員に名を告げると、すぐに個室へ案内された。掘りごたつ式の席で、中央には厚みのある黒塗りのモダンなテーブル。和紙を使ったシェードの照明は、温かみのある空間を演出している。雑誌に掲載されていた内装そのままの座敷だった。

アリサたちはまだ着いていなかったが、テーブルには四人分の箸とお通しが用意されていた。部長とわたしは、入ってすぐ手前の席に並んで座る。

「部長。貸していただいたハンカチは、月曜日に新しいものを買ってお返しします」

洗って返してくれればいいから、と人見部長は優しく言ってくれたが、ただ返すのはなんだか申

しわけない。せめて、何かお礼はしようと思っていた。

「それにしても、ずいぶん長く泣いていたね。そんなにYUMAってモデルに感動したのかい？」

「は、はい……、わたしずっと、か、彼女のファンだったので。久しぶりに姿を見て、感動しちゃいました」

詳しく話すのも憚られ、ひとまずYUMAのファンだということにした。これも間違いではない。そのときだった。

「すみません、お待たせしてしまつて」

花束を抱えたアリサが現れ、部屋の中が一気に明るくなったように感じた。さすがモデル。プライベートでも、その存在感は半端ない。

「茅野さん、お待ちしていましたよ」

素早く立ち上がった部長がアリサを出迎える。わたしも急いで立ち上がり、頭を下げた。

「先ほどはありがとうございます。助かりました」

アリサの言葉に、部長は「いやいや」と首を横に振る。

「なに、大したことではありませんよ。おかげで僕は、その花束をあなたに渡すことができました」

「ええ。私、嬉しくつて持ってきてしまいました。早く水切りして活けてあげたほうがいいんですけど」

「そんなに気に入っていただけたなら、贈った甲斐もあるというものです」

部長に促されたアリサは、奥の席に回ると、花束をそつと脇に置いて腰を下ろした。

「おひとりですか？ 確かお電話では、マネージャーの方も同席されるということでしたが」

アリサが落ち着いたところを見計らい、わたしたちも座った。

「ええ。彼、車を駐車場に停めているの。お待たせしていると思って、私は先に来ました。でも……」

アリサがわたしのほうをちらりと見る。

「そちらのお嬢さんは、私よりYUMAのほうが良かったのね。でも、ごめんなさい？ あの子はちよつとフクザツなのよ」

「す、すみませんっ！」

しまった、直前まで話していた内容を聞かれていたのか。同じ事務所とはいえ他のモデルのファンだなんて、アリサにとって気分の良い話ではない。とにかく、わたしは平謝りだ。

「あら、別にいいのよ？ YUMAのことを知っているなんて、そんな子、なかなかいないもの」
アリサはにっこりと目を細めた。同性ながら思わずドキリとしてしまうその表情は、写真で見るとよりも何倍も迫力がある。

アリサはYUMAの秘密を知っているのだろうか。さつき「あの子はフクザツ」だと言っていたけれど、どういう意味で言ったのか、わたしにはわからない。

そのとき、男性の声がした。

「申しわけありません、遅くなってしまつて」

アリサのマネージャーが到着したのだ。

しかしその声が聞こえた瞬間、わたしは個室の入り口に背を向けたまま、体を硬直させた。

部長は、すぐに向き直って彼を迎える。でも、わたしは動けない。誰か、嘘だと言って。夢なら覚めて。お願い。

「広戸、遅いわ」

「すみません、車を入れるのに手間取りました——人見さん、急なお話にもかかわらず、お時間を取っていたできありがとうございます」

わたしは視界の端っことで、アリサに「ヒロト」と呼ばれた男性が膝をついて部長に挨拶するのを見た。

どうしよう。わたしはどうしたらいい？　こんなことなら、来なければよかった。けれど、時すでに遅し。後悔先に立たず。嘘だと思いたくても、これが現実。

「いえ、こちらこそ席を設けていただき感謝しています。どうぞ奥へ」

「失礼します」

男はするりと立ち上がって、アリサの隣に腰を下ろす。

「あなたが、先ほど電話をかけてこられた方ですか？」

「はい、アリサのマネージャーの広戸優真と申します」

そう、彼は間違いなく優真だった。

「では改めまして、アドワークス創新堂の人見と申します。彼女は、部下の鹿島です」

「……鹿島です」

顔を上げなければ、変に思われてしまう。覚悟を決めて、わたしは正面を見た。そして、ふたたび固まる。

そこにいたのは、わたしが知っている優真ではなかった。今日、ショーで観たYUMAとも違う。優しいな容貌、メガネの奥の澄んだ眼差し。形のいい鼻も口もとも、一つひとつ見ていけば、あのころの記憶に重なる。けれど、今わたしの目の前にいるのは、少年から鮮やかに成長を遂げた男の人だった。そんな彼から目を離すことができない。

「鹿島くん？　どうした？」

「え？　あ、す、すみませんっ」

部長の声でハッと我に返ったわたしは、慌てて下を向く。

恥ずかしいっ。いくらその変貌ぶりに驚いたからといって、あまりにもじっと見すぎだ。

「広戸に見惚れちゃったのね。その気持ち、わかるわ。だって男にしておくのはもったいないくらい、綺麗なもののね、広戸」

うつむいたわたしの耳に、どこか楽しげなアリサの声が届く。

わたしが優真を見つめてしまった本当の理由は違うけれど、誤解されても仕方がない。

「アリサさん、そういう話はちよっと……」

優真は困惑した様子で話を遮ろうと口を挟んだが、アリサは構わず続けた。

「あら、本当のことじゃない。うちの事務所、広戸が入ってから、モデルだけでなくマネージャー

も顔で採るのかって言われているでしょう。ま、広戸は特別なんだけど」

「アリスさん——」

やはり、優真はアリスのマネージャーなのだ。

親しげな二人の会話を聞きながら、わたしの胸はどういうわけかきゅっと痛み、息がつかまる。モデルとマネージャーなのだから親しいのは当たり前なのに、疎外感みたいなものを感じてしまった。

今日のわたしはいろいろと失態が続いて、ちよつとしたことでもひどく気になってしまふのだろう。そうでなければ、二人を見て羨ましいいだなんて……おこがましすぎる。優真は、わたしのことを親友とは……ううん、友人とさえ思っていないかもしれないのに。

「そろそろ何か頼みましょうか。このお店ははじめてなんですが、おすすめはありますか？」

人見部長がメニューを広げて、アリスの前に置いた。

「このおすすめはね、鮭の唐揚げなのよ」

「ほう、鶏ではなく鮭ですか。旨そうですね。ではそれを頼みましょう。飲み物はどうされますか？」

「ビールがいいわ。そのあとでワインも飲みたいな。いいでしょ？ 広戸。もう飲んで」

「はい。でも飲まれる前に、何か胃に入れてください。今日はほとんど食べていないんですから」

「それは、あなたもじゃない。あ、そうだわ。チーズフライもいいかしら。カマンベールチーズに衣をつけて、オリーブオイルで揚げたものなの。ビールによく合うのよ。それから揚げだし豆腐も」

「アリスさん、揚げ物が多すぎです。根菜類の炊き合わせもお願いします」

「なんでも遠慮なくどうぞ。鹿島くん、君は何を頼む？ そういえば、我々も昼に食事してから何も食べてなかったね」

「え、あの、わたしは……」

一瞬だったけれど、優真は目を伏せて眉間に皺を寄せた。これは、苛立っているときに見える彼の癖だ。こういう癖は変わらないのだな、とほつとしたのも束の間。この状況、もしかしてわたしにイラッとしているの——？

わたしは、思わず立ち上がった。

「すみません。ちよつと顔を洗いに行ってきます！」

バッグをつかみ、パンプスに急いで足を突っこんだわたしは、部屋を出てトイレを探した。店の廊下は長く、ギリギリまで照明が落とされているせいで、非常口はわかるけどその他の案内がよく見えない。

ちよつとすれ違った店員に場所を聞き、ようやくトイレの前に行くと、そこには優真が立っていた。

「どっち行ってるんだよ」

「——はい。逆方向でした」

トイレは部屋を出てすぐのところにあつたのだが、わたしは気づかずに反対側へ向かってしまったのだ。

「さっさと済ませてこいよ。ここで待ってるから」
「待ってるって？」

優真もトイレ？ 男性用は隣にあるのに、どうしてだろう。

「美咲に、話がある」

ああ、そういうこと。わたしが席を立ったのをいいことに、アリサや部長の前ではできない話をしにきたというわけか。

「今？」

何を話す気だろう。昔のことを口止めされるのかな。

「美咲のトイレが終わってからだ。早く行ってこいって」

暗くてよくわからなかったけれど、優真の左の目もとがピクリと動いたように見えた。これは、かなり苛立っているときの癖だ。

わたしは素早くトイレに駆けこみ、用を済ませた。洗面台で手を洗い、鏡に映った自分の顔を見る。

ひどい顔をしていた。疲れていて、冴えない顔色、腫れぼったい目蓋。これはショーを観ながら泣いてしまったせいなのだけど。そしてパサついた髪。

ただでさえあまり高くない女子力なのに、大幅ダウン。

今週かかりきりだったCMのアイデア出しのせいかな。先輩の久世さんに、ことごとくボツにされてしまった仕事だ。昨日、なんとかOKをもらえたけど、来週はそのアイデアをまとめて、企画

書を作らなければならない。

蛇口をひねって両手で水を受けると、えいやつと顔を洗った。それを何度も繰り返す。どうせこれ以上ぼろぼろになることはないし。

そのあと、濡れた顔をハンカチで拭いて外に出た。

「ずいぶん派手にやったね。顔を洗ってくるって言ったとおり」

「うん、ちよつとね」

前髪が濡れてるよ、と優真はわたしの髪に指先を掬め、水滴を弾いた。

「ほら」

それから、ほんわかと温かいおしぼりを渡してくれる。

「……どうしたの？」

「通りかかった店員に頼んで、持ってきてもらった」

いや、わたしが聞きたかったのはおしぼりのことじゃなくて、どうして優真がトイレの前で待っていたのかなってことなんだけど。

「美咲、こつち」

「え？ 部屋はこつちだよ？」

さんざん迷ってトイレと部屋の位置関係を把握したわたしは、優真が向かおうとしているのが、まったく別方向だとわかる。

「話があるって言ったろ。そこじゃ、できない」

「でもわたし……部長についてきただけとはいえ、接待するほうだし」

部長に断りを入れず、長時間席を外すわけにはいかない。

「人見さんには俺から連絡しておいたから、大丈夫」

そこまで言われると、わたしは優真についていくしかなかった。あらかじめ店員に話していたのか、すぐにカウンタース席に案内される。

「あの、話って——」

腰を下ろしたわたしは、おすおすと訊ねる。

「悪い、まず何か食べさせて。今日は本当にほとんど食べてないんだ。アリスに付き合わされて」
わたしが頷くと、優真は料理をオーダーした。鮭の唐揚げにチーズフライ。さつき、アリスがおすすめだと言っていたものだった。

「何か飲むなら、ビールでもワインでもどうぞ。俺は……、やっぱりジンジャーエールだな」

「お酒を頼めばいいのに」

「本日車なんです、俺は」

あ、そういえば、駐車場に車を停めてたんだよね——

「じゃあ、わたしもいや。オレンジジュースにする」

こんな席でお酒ではなくソフトドリンクを注文するのも不思議な感じだけど、まあいいか。
やがてドリンクと料理が運ばれてきて、乾杯する。

唐揚げとチーズフライを口にして、少し落ち着いたとき——

「美咲、ちよつと聞くけど。人見部長さんて、独身なのか？」

「はい？」

唐突に、優真は部長のことを訊ねてきた。

「独身よ、今は。ねえ、優真、まさか——」

わたしの脳裏に、もやつとしたものがよぎった。

「そうか、独身か。第一関門クリア、と。カッコ良かったもんな、ロビーで助けてくれたとき。一目惚れもあるか」

「もしもし？ 優真？」

わたしも、あのとときの部長はカッコ良いと思ったけど。

優真の話って、部長のことなの？

「それに、泣いている子にさりげなくハンカチを渡してくれるし。いかにも大人の男って感じだよな」

えっと？ 泣いている子にハンカチって、それはわたしのこと？

「なんで知ってるの!？」

「ステージから見えたもん」

テーブルに肘を置いて頬杖をついた優真は、どこか面白くなさそうに言った。

「見たもん、って。見えるものなの？ ランウェイを歩いてるとき」

「結構見えるよ。花束を膝にのせた美咲は、かなり目立っていたし」

「じゃあ、じゃあ——」

「うん。美咲がずっと泣いていたの、知ってる。ねえ、どっち？ 前みたいに、失恋したから泣いたの？ それとも思いが通じて、嬉しくて泣いたの？」

なんて意地の悪いことを訊いてくるんだ。「前」って、高校時代にわたしがフラれたときのことを言ってるの？」

「……どっちもはずれ」

「じゃあ、なんであんなに泣いてたんだ？」

「あのね、優真。わたしも訊いていい？ どうして優真、ガルフエスに出たの？ ていうか、いつ日本に帰ってきた？ あ、じゃなくて……ああ、もう！ 今まで何してたのよ。まったく連絡もくれなかったのに、今日、再会するなんて……何よ、この展開。優真、めっちゃめっちゃカッコ良くなって別人みたいで……でも話すと昔のまんまだし。ねえ、わたしたち、どうしてここで飲んでいるの？ あ、いや、飲んでいるっていうか、ソフトドリンクだけ」

一方的に質問されるのは好きじゃない。だから質問には質問で返してやろうと彼の言葉を遮ったのに、わたしの口から出たのは、ほとんど愚痴のようなもの。

優真からの連絡が途切れたことについては、納得しているつもりだった。だけど、本心は違っていた。

だから、泣いてしまったのだ。優真——ステージのYUMAを見た瞬間、自分でも気がつかないうちに溜めていたものが噴き出してしまった。こればかりは、絶対に話せないけど。

わたしの剣幕に押されたのか、優真は頭を下げた。

「ごめんなさい。全部、俺が悪い。俺のせいです。いろいろカッコつけてたけど、やっぱり美咲が忘れられなかった。情けないよな」

え？ どういうこと？

「優真……それ本当なの？ わたしが忘れられなかったって」

「本当だよ。イギリスに行って、このまま会わなければ忘れられるかって思ったんだけど、無理だったんだ。でも日本に戻ってきたからって、今さらのこの顔出しても美咲は許してくれないだろうって考えてたから、連絡できなくて。なのに今日、客席で泣いている美咲を見つけてしまった……」

ということは何？ 優真は——

どうして彼がわたしのことを忘れたかって思ったのかはわからなかったけれど、結果としてはこういうことだ。

「優真、わたしたちは昔と変わらず親友なんだね？」

良かった。わたしの一方的な思いではなかったみたい。

「し……しん……ゆう……、そ、そうだね。親友だよ、俺たちは。変わらず、昔のまま、ずっと」
優真が顔をくしゃくしゃにして言った。

「そういうことなら、応援しなくちゃね。優真の恋が叶うように」

恋愛の形なんて、人それぞれだ。相手を何よりも大切だと想っているなら、少々の年の差、男女

の違いなんて、大した問題じゃないはず。

「俺の、恋？」

優真は、怪訝そうに首を傾げた。何を言っているのかわからない、とても言いたげだ。

「人見部長とうまくいくように応援する。部長はね、とっても優しく、部下の面倒見も良く、素敵な人なの」

「——美咲さん、本気で言ってくれてます？ それってさ、今の俺にはあんまりですよ。勘違いもはなはだしいっていうか……そんなこと言われたら俺、またイギリスに行きたくなっちゃいます」
どうしたのだろう。

優真はどつと疲れた表情を浮かべて、遠い目をした。

「え？ わたし、変なこと言った？」

優真が左の目もとを引きつらせる。

「悪いけど俺ね、ああいう格好しちゃうけどさ、恋愛はすこぶるストレートなんだよ」

「ストレートって、思いこんだら一直線？」

「そういうことじゃなくて。いや、そういう意味があってもいいけど、俺は女の子が好きだってこと。可愛い女の子がね。そこは絶対、間違えないでほしい」

「そ、そうなの。わかった」

優真の雰囲気気圧されたわたしは、こくこくと頷く。

女の子が好きだというからには、さすがに人見部長はないか。部長、本当に素敵な人なんだけ

どな。

……優真は誰と恋をするのだろうか。それとも、すでにしているのかな。

そんなことを考えていたら、鼻の奥がつんとした。今日のわたしは、情緒不安定になっているみたい。

その後、簡単に互いの近況報告をしながら料理とお酒を楽しんだ。

「そろそろ、部屋に戻ろうか」

「そうだね。こっちで結構食べちゃった」

優真の言葉に頷くと、彼は店員を呼んで会計を済ませる。

「払うよ。食べた分」

バッグから財布を取り出そうとしたわたしの顔を見て、優真はにやりと笑みを浮かべた。

「ばーか。ここは奢らせろ。今日の仕事は、特別手当がつくからな」

「だけど恋人でもないのに、奢ってもらうのは……」

「美咲って、そういうところ変わってないね。借りは作りたくないって性格」

借りは作りたくない。

確かに、そのとおりだ。借りてばかりになってしまっていると、対等ではなくなる気がする。特に、彼とは親友という仲だからこそ同じ立ち位置でいたい。

しかし、一瞬、優真が顔を歪ませたことに気づき、ここは黙って奢られるべきだと判断した。

「……じゃあ、奢られてあげる」

「よし、よく言えました。何気になから目線だけど」
にっこり笑った優真に、わたしも笑みを返す。

そして部屋に二人で戻ると、アリサと部長は何やら盛り上がりつつあった。
「鹿島くん、もう大丈夫なのかい？」

「え？ はあ、まあ」

隣に腰を下ろしたわたしに部長が声をかけてくれたが、どういう意味だろう？ よくわからない。
首を傾げていると、部長が言葉を続けた。

「君を追いかけてくれた広戸さんから、電話をもらったんだ。気分が悪そうなので、別の部屋で少し休ませるって」

「あ……、はい、もう大丈夫です」

そういう話にしていたのか。優真をちらりと見ると、アリサの隣で涼しい顔をしている。

彼は余裕の笑みを浮かべながら、アリサと部長に向かって口を開いた。

「お話が弾んでいたようですけど、何を話されていたんですか？」

すると、アリサがにっこり笑って答える。

「人見さんの本当の気持ち。あのときお花をくださって、ずっとわたしのファンだったとおっしゃられたけど、実際のところどうなんですかって」

「本当ですよ。あの場で言ったことはすべて」

苦笑を浮かべる部長に、アリサはなおも突っこむ。

「それは、いつからなんですか？」

「十年前、メルル・ティーンの四月号であなたを見たときからです」

さらりと部長が口にした「メルル・ティーン」とは、すでに廃刊になってしまったティーンズフアッション誌。高校時代にわたしが買っていた雑誌と双壁をなして、大人気だった。

アリサは、驚いたように瞬きを数回繰り返す。

「え、十年前のメルル・ティーン四月号って、私がデビューした号……」

ということとは、部長はアリサがデビューしたときからファンをやっているのか。筋金入り？

「実はね、僕には先見の明があるんですよ。これが結構当たりましてね。茅野さんを見たとき、十年後にはトップモデルになると確信しました」

部長の返事を聞いて、アリサは満面の笑みを浮かべる。

「人見さんがおっしゃること、そのまま信じてもいいのかしら。ねえ、他にもそんなふうに期待されている方はいらっしゃるの？」

小首を傾げるアリサの眼差しから、部長とすっかり打ち解けているのを感じた。

「ええ。同業者に一人いましてね。こっちはそろそろかな、と開花するのを待っているところ
です」

「どなたなんでしょうね、人見さんに見込まれた方は。人見さんの会社とお仕事できるのが、ますます楽しみです」

「ええ。良いものを作りますよ、必ず」

その後、アリサはワインを頼んだ。部長はビール、優真とわたしは先ほどと同じソフトドリンクだ。

しばらくの間、四人でとりとめのない会話を楽しむ。

十一時を回ったころ、部長はさりげなく席を外した。

「さて、ぼちぼちお開きにしましょうか。年頃のお嬢さんをいつまでも引きとめては悪いしね」

ふたたび部屋に戻ると、部長はにっこり笑って言う。

「それでは」と立ち上がった優真に、部長は小声で何かささやいていた。たぶん、この店の支払いについて話しているのだろう。

「今日はご苦勞様。楽しかったわ」

「いえ！ こ、こちらこそ、ありがとうございます」

まさかアリサに^{おまじな}勞いの言葉をかけられるとは思っていなくて、わたしは慌ててそう返す。

アリサはふわりと笑みを浮かべ、部屋を出ていった。後ろ姿もなんて優雅なんだろう、とついつい見惚れてしまう。

そのときぼんと肩を叩かれ、振り返ると人見部長が立っていた。

「今日は本当にお疲れ様。それでね、僕は彼女を送っていくことになってしまつて。君、ひとりで帰れるかい？」

「はい、大丈夫です。まだ電車も動いていますし」

「悪いね。じゃあ月曜日に」

いつの間にかそんな話になったのか知らないけど、アリサを追いかけられるようにして出ていった部長の後ろ姿を見送った。

「アリサもやるなあ。送っていくって言つても、そこまでなのに」

最後に部屋を出た優真が、わたしの横に立つ。

「そこまで？」

「今夜、そののレイトンに部屋を取つてるんだよ、アリサは。ホテルのバーでまだ飲む気なのか」

「優真はいいの？ アリサのマナージャーなんですよ？」

「こういう場合、どうするんだろう？」

いや、部長は紳士だし、変に気を回す必要はないだろうけれど。

「今日の仕事は終わりました。この店に来るとき、芸能記者は振り切つたし、アリサも大人だから大丈夫じゃない？ ということで、俺たちも行こうか」

「へ？ どこに？」

「どこへなりとも。ただし車です。もう帰らなくちゃいけないなら、家まで送る」

「どうしようかな。行くなら、どこか寛げるところがいいな」

思わぬ再会で、さつきは少しパニックになつてしまつたけど、今はもう落ち着いていた。それに、正直なところまだ帰りたくない。せつかくだから、優真ともっと話したかったのだ。

「ふむ。こちらのお嬢さんは寛ぎたいと。だったらうちに来る？ ここからそんなに遠くない」

「優真のうち？」

「美咲とまだ話し足りないんだ、俺」

「どうする？ と顔を覗きこまれたわたしは、気がつくど頷いでいた。

「お邪魔します。わあ、広い。え？ 何、この眺め」

優真の家は、ホテルから車で十五分ほど走ったところにある高層マンションだった。

わたしは部屋に入ると、その眺望の良さに歓喜の声を上げた。プリンス・レイトンやターミナル駅にあるツインタワーなどの高層ビルが見える。

「ね、いつからここに住んでるの？」

「引越してきたのは、最近。それまでは事務所の持つてるマンションに住んでた。他の子たちと一緒に、ルームシェアだったからね」

「ふーん」

明るい部屋で、優真の姿を改めて見る。とたんに、わたしの胸は鼓動を速めた。

体にフィットしたスーツも、締めているネクタイも、すごく似合っている。優真がこんな「オトナの男性」になるなんて。世間で言うところの、イケメンってやつだ。

「美咲、本当にひどい顔してるね。今日、疲れた？ それとも仕事がついのかな」

「しみじみ言うな。女子力低下は自覚してるんだから」

「磨けば綺麗なのに、もったいない」

もっと自分に手をかければいいのに、なんて優真は呟く。

彼の表情はとても真剣で、わたしはドキリとする。どうしよう。鼓動がさらに速まって、口から心臓が飛び出してしまいそうだ。

「冗談。綺麗って言葉はわたしじゃなくて、優真のほうが似合うよ」

「ごまかすように言っただけれど、少しだけ声が震えてしまった。」

「……ねえ、優真。頼みがあるんだけど」

「何？」

「女の子の格好……ていうか、YUMAになつてくれない？ 優真、わたしといるときにはたいてい女装してたでしょ？ 久しぶりに会ったせいとか、今の優真を見ると知らない人みたいなんだ」何を意識しているんだろう、わたし。

「知らない人ね。なんか傷つくな、俺。はいはい、美咲のご要望なら応えなくちゃね。ちょっと待つてくれる？ あ、でもフルメイクするのは勘弁ね。ウィッグと服だけだよ」

「うん。ごめんね」

優真は少し拗ねたような顔をして、奥の部屋に消えた。しばらくすると、ラフなマキシ丈のワンピースに、ストレートロングの鬘をつけて現れる。

「これでいい？」

「うん。YUMAだ」

ショーでランウェイを歩いていたYUMAとはちょっと違うけれど、高校時代の彼を思い出させ

る。わたしはほっとして笑みを浮かべた。

「今度は美咲の番ね。その顔、少しやってあげるから」

わたしの番？ そのとき、優真がメイクボックスらしきものを持っているのに気がついた。

「何をやるの？ 優真？」

「まずはクレンジング。そしてマッサージ。塗りたくるのはそれからだ」

かくしてわたしは、優真に顔を弄られることになった。

クレンジングローションで顔を拭かれたあと、洗面所に案内される。洗顔フォームで顔を洗って戻ってくると、リビングの大きなソファに座らされた。優真も隣に腰を下ろす。

「え？ 何これ？ 気持ちいい。優真、どこでこんなこと覚えたの？ イギリス？」

マッサージ用のクリームをたっぷりすくった優真の指が、わたしの顔を撫でるように這う。

「こんなの、普通のお手入れだろ。美咲のことだからやってないだろうけど」

はい、おっしゃるとおりです。

「だって、仕事が忙しいのよ。納期に間に合わなくて、会社に泊まりこむこともあるし」

「働きすぎじゃないのか、泊まりこむなんて」

「わたし、まだまだひよつ子だからね。いろいろ経験してスキルを上げて、早く一人前になりたいの。それより優真、イギリスに行った本当の理由を聞いてもいい？」

額をくるくる、頬をくるくる。優真は優しくマッサージしてくれる。

気持ち良くて思わず眠ってしまいそうなか、わたしはずっと気になっていたことを口にした。

「……女性モデルとして、限界を感じてたんだよ。かといって、男性モデルとして活動するには、肝心の身長が足りなくて」

優真の身長は、確か百七十五センチ。女性モデルなら標準なのかな？

でも、男性モデルとしては低そうだ。

「そんなときに、『マリー・ブルーム』っていうブランドでプレスをやっている人と知り合ったんだ。それで、ショーに出てみないかって誘われてさ」

プレスというのは、そのブランドの広報的な役割を担う人らしい。優真を誘ってくれたのは、鶴田さんって男性。彼には、とてもお世話になったみたい。日本に戻ってきたときに今のモデル事務所を紹介してくれたのも、鶴田さんなのだそうだ。

「【マリー・ブルーム】？ 毎年、海外のいろんなコレクションに参加してるよね。ていうか優真、ロンドンのコレクションでそのブランドのモデルやってたでしょ？」

「あ、チェックしてくれてたんだ。うん、あとにも先にも、一回だけだったけどね」

「どうして？ こっちではすごいニュースになったよ。日本人モデルが大活躍したって」

「そうは言うけど、俺、男だよ。骨格も肉つきも、やっぱり女性とは違う。それにね、ここ数年の流行のモデルは、アリサのように出るところは出て引っこむところは引っこんで、いわゆる女性らしい丸みを持ったタイプなんだ。細かったらOKっていう、少し前の時代だったらまだ良かったんだけど」

「モデルにも、流行ってあるんだね。それで、ショーに出たあとは？ 現実逃避するために、その

ままイギリスに滞在してたってこと？」

「うわっ、ずばり言ってくれるな、美咲は。まあ、そうなんだけど。……モデルとしての限界と心の限界。あのころは地獄だった」

優真がそんなことになっていたなんて、ちつとも知らなかった。わたしは思わず身を乗り出した。「どうして言ってくれなかったのよ！ 高校時代は、いつも一緒にいたのに。そりゃ、大学に進学したあとにはちょっと疎遠そんになってたし、わたしじゃ頼りにならなかったのかもしれないけど……話を聞くぐらいはできたよ。親友なのに」

「こら、いきなり動かない。マッサージのクリームが服についちゃっただろ」

「あ、ごめん」

思わず謝ったけど、優真はどこかわたしの言葉をはぐらかしているみたいだった。

「横になって。マッサージ、もう少しで終わるから。頭をこっちに持ってきて」

「え？ え？」

ソファに座り直そうとしたわたしは、優真にくいっと体を反転させられ、ソファの上で仰向けあむむになった。

「ちよっと、これっ——」

「膝まくら。やってみたかったんだよね」

優真が覆おぼいかぶさるように、顔を覗のぞきこんでくる。さらりと鬢かづの長い髪が落ちてきて、わたしの耳をくすぐった。

「やだ、近いよ」

優真の顔はすぐそこ。こんな至近距離、これまであっただろうか。

「あ、ニキビのあと。こっちはソバカスカ。肌ぼろぼろだね」

「うるさい。仕事が忙しいの。だから手入れしている余裕なんてないの」

「それはさつき聞いた。この分だと、付き合っている男もいないな」

「あー、それNGだよ！」

「はい、NGワード言っちゃいましたー」

優真は、おかしそうに声を上げて笑う。

わたしは悔くしくて言い返す。

「で？ 優真はどうなのよ。付き合っている人——えっと男？ 女？ いるの？」

「美咲、俺さつき言ったよね。可愛い女の子が好きだって」

優真は少し怒った顔をする。そんな表情にも、わたしは見惚みとれそうになった。

「そう？ 可愛い女の子ねえ。わたしには縁がない言葉ことばだわー」

「自分を卑下ひげすることを言うんじゃない」

「え？」

優真の顔がいつそう近づき、わたしは息を止めた。

「美咲は可愛いよ。特に泣き顔がね」

こっん——